

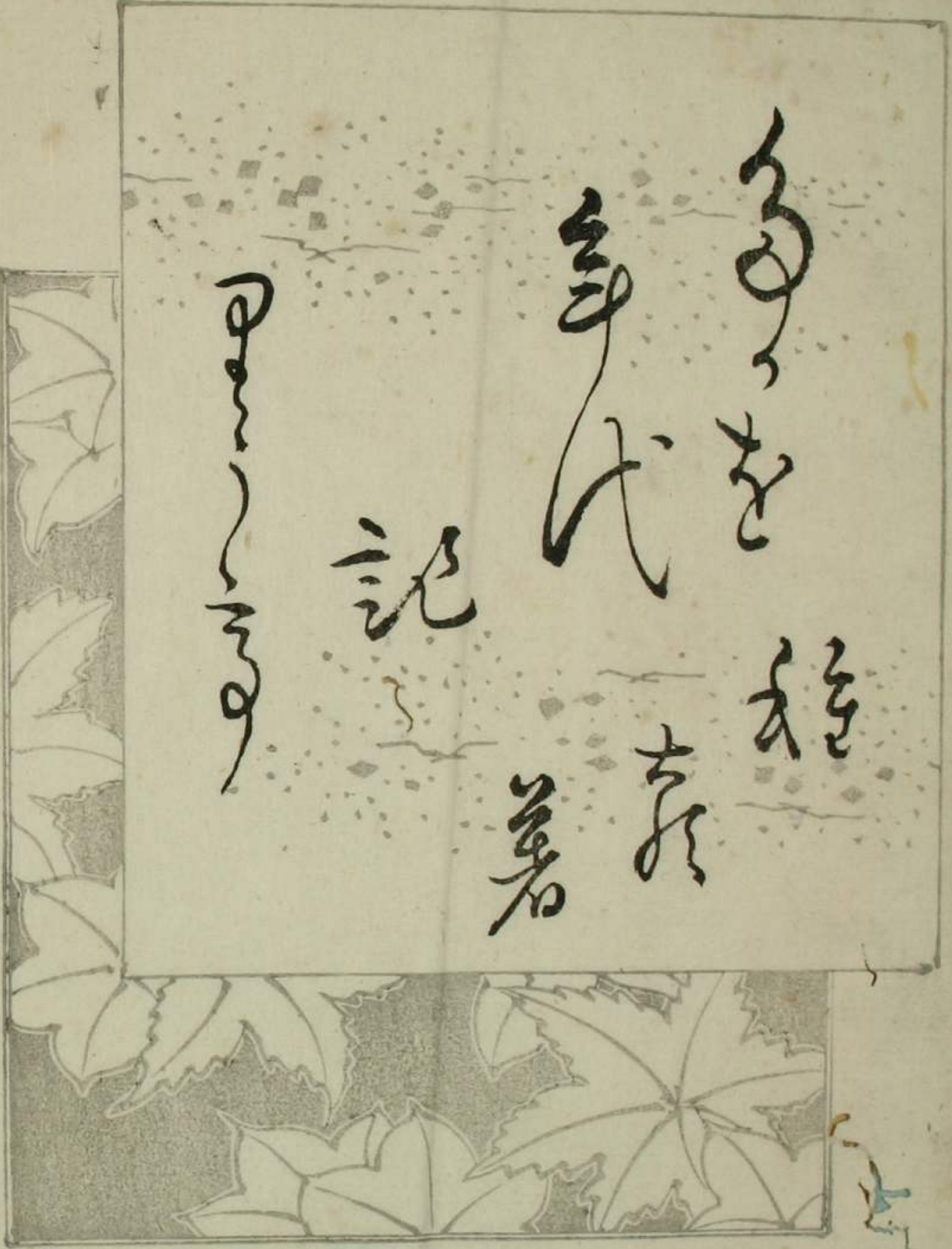
門 36
號 3927
卷

多々
種

多代
著

記

Penner



しよんのかげをさしけりあ
たりきぬきあはれり世の
るはる人をもつていひぬら
雨の音はあはれおにくれあ
つげりしけれりたふけり
かえさるのあはれなきあ
敬ふあはれにまじりてか
るあはれいふるけりか
くはるあはれいふるけり

11

切せしむらむとておとせたまふた武世のら
そむもはらむあつたむお祓祓
ふんふん然くもやむおんま即れ病
かかむむいさぬしたむおむらこし
素じぬおむらむらむおむらむら
即よまぬおむらむらむらむらむら
幸すあむらむらむらむらむらむら
えりたむらむらむらむらむらむら
清みくむらむらむらむらむらむら

そむらむらむらむらむらむらむら
まむらむらむらむらむらむらむら
ふらむらむらむらむらむらむらむら
局むらむらむらむらむらむらむら
ひらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
とむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむら
のむらむらむらむらむらむらむら

申の路んは城なみくハのニハハ
 うはめの智るにて吉野のこる尾り
 かみささんかきさる尾ハよの
 志もにたさんことさるるハの
 世に侍るる相生みの松の佐多
 たるから 是の松の竹さる尾らと
 月夜にさるその名こと申。今この考
 へおけはさる知事なすことさる
 月の影をさるおることさるのま

何人さるかに松の影の影は
 をさる松の影さるかにさる松の影
 こよまかたさる影もさる松の影
 さるかにさる影もさる松の影
 若さるかにさる影もさる松の影
 月に神の影もさる松の影
 いやらるかにさる影もさる松の影
 侍るかにさる影もさる松の影
 の書きたるかにさる影もさる松の影

あは田のさし子任まよはちの種換
ちちちてあは柳の糸ささく木のあ
計ちちちささくささくささく
久さささささささささささ
西のささくささくささくささく
をささくささくささく

又川の花

あは田のさし子任まよはちの種換
ちちちてあは柳の糸ささく木のあ
計ちちちささくささくささく
久さささささささささささ
西のささくささくささくささく
をささくささくささく

بسم الله الرحمن الرحيم

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

"

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

الحمد لله رب العالمين

九例

○高尾考ハ明和の頃原富翁古老の傳ハ及自の記憶より筆記
し初め多き又作者不知物二三本ハ今好事の人寫し傳へ珍重
せり天明より享和に至り何某のしこれの先生前の高尾考を原より
古書を引校正あり本あり今又是を増補せんをそのまじしとやらんれど
予が友より竹本氏豊芥子とげり三亭子その他より吉原の古書を多く
藏せり人あや其うちあり先達の眼ふりてとて物もくわら
る前書ふもれり書を加へくわらるる

○代々の高尾のあやゆき或は出生の地或は其身の地あり等の事ハ前書及
それらの雜書ふし見たりれど其説區々して愚意ハ是非を定め難け
きばかりし省き唯年表年表なる物の如く代々のならぬの見安からん
事のとと要とを

高尾の傳ハ先生古書ハ更なり生産の地ハ傳へ古老の茶話ハ周お
ぐりもとあられり他の眼や奇本ありと兼て聞けり彼書葎市
のときと俟是ふ照して見たりて誤りも多し適考ハ得る功も顯れ
老木の柳も思ふに緑の春ふあはれせん歎

○古書といふも悉く取難し其故如何とあるに寛文二年の吉原伊勢物語ハ
箕山が大鑑より新町を男と同本を元禄の幕揃ハ延寶の芥川
是のちより原來一時の戯を草紙とて改彫改めたる年号と削り
入木をとも見ゆ用捨して抄出たりと誤りも多し

○万治より元禄に至るの間予意を用ひ前書及じる事もたあらはれども
寶永より末は予も先達の説を改めざらんとい記し

千時天保辛丑子月念八日

雪開戸

修紫樓上柳翁記

一名口説草
吉原用文章の画

振袖多々と思ふが三代目
高尾出来と云ふて
寛文四年頃の刻本を以て



延宝二年印本吉原失墜の引書
くせ草とあるは此用文章の事也



口説草の
うらたたり
ものめ
我々
志
ぐれ
あふねた
あるふひ
どにこそ
のすん
こんらん
やうてひさ
うらたたり

右に摸くは吉原六方あり予が前著用捨箱の如く寛文中の草紙あるを以て用文章とハ画風の異なり
此高尾の前は新町やうぢ内せんぢゆ何ぞて同内と記
しるは當時の高尾はやうぢゆ内せんぢゆの家はわらじ

「高尾が節を見よ
見よ見よ
今おれを見よ
たむか
少袖 色少袖
いろあそび
高雄寛保ふ絶天保ふ
て百年近曾
小石川大塚より少女盆歌
ふかふか
志の
り書加
日記の
録

引書目録

前高尾考より引く八首
吾妻物語袖鑑八異本を故し載

吾妻物語二本寛永十九年

吉原六方寛文

吉原源氏五十四君貞享四年

吉原鑑万治三年

吉原失墜延宝二年

吉原つゆ草元禄二年

高尾物語一枚摺

吉原大雑書延宝三年

吉原つれ草宝永三年

吉原伊勢物語寛文二年

吉原芥川延宝

吉原そや染正徳三年

吉原用文章寛文

山茶本草延宝八年

繫情菖蒲草正徳六年

吉原根元記寛文六年

山茶胡柿頭巾延宝八年

櫻享保十九年

吉原讚嘲記寛文七年

吉原下職原天和元年

吉原見物左門元文三年

吉原呼子鳥寛文八年

吉原買物調天和二年

細見記數本

増補袖鑑寛文

吉原大豆俵天和三年

以上吉原の事式記一冊子也

此餘画本鯉の鉤針俳諧是天道花見車の類吉原の草紙あるは茲し不載

諸先生高雄考集覽

一名 高尾年代記

初代高尾未詳事

種彦補綴

寛永十九年

開設 吾妻物語

元吉原遊女の名寄後代の細見記の類より序ふ

此類の花のよめる書はよりよかむをたれまらるはるはるの
よもりよりて草紙を遠國まで埋木の花きき事にあく一せ
いふらぬかゝん事を悲しきことより新御とていふこと
年古郷の名をとりたせむと思いたつる旅衣はあふるりて
武花の園花のほにたあふらふとて打めりて吉原に趣
き入ふ問て遊女の名を記し也此草紙翌年再度末を彫改し
本に見るよ齋寛文其異同は下よ辨をこに抄出する十九年の彫

高尾

一昔多し内こし いちあつたりをいへんさ月
 一昔多し内こし いちあつたりをいへんさ月
 たんこたのむ ちけいあつん

高尾

一昔多し内こし いちあつたりをいへんさ月
 一昔多し内こし いちあつたりをいへんさ月
 たんこたのむ ちけいあつん

○巻中の画は高雄の事、ふらふらと歩む漸々小画風のかきとゆふさ
 一々れ見あふ人の目さす草ふ筆のつらふ模りさか

高尾一

此草紙の板元ハニ橋
 と名のり京二条通鳥
 丸之昔ハ江戸より草
 稿をのいせ彼地まで
 製本志すものゆかり
 画ハ京の人のまきりて歟



一多と町のいさろと 十九畝
 一三と町のいさろと 十七畝
 一五と町のいさろと 七畝
 一新町のいさろと 廿二畝
 一すも町のいさろと 三十畝
 一二町めれのいさろと 廿九畝
 一けりれのいさろと 廿五畝
 一けりあけや 廿八人
 一中の町あけや 十人
 一新町のあけや 九人
 二町めれのりあけや 八人

五町よと町もてふのいさろと合百二十五畝

寛永十九年 六月吉日 津兵衛開板

如此巻尾ふちや後ふ摺たる本此半葉無し二十五葉とて全し
 寛永廿年ふ廿六丁廿七丁二葉を彫添せ二丁ふ二行入木して脱
 したる故補ひ本を見らば是れ太夫より高尾あり

高尾二

この増補の廿六葉ふ

「この十六人ふたゆふたはとまぞうらる」と記し十六人の名をのうらに

京町

四の葉内 十六

尾平はともゆらけはつとんとおのりともおのり
 花のしらさるらる

たろお 十六

たろを屋中よととのあらしのそけい
 ゆめもいけいとのあらしのそけい

大夫高尾の
 名をよとと
 ゆめ見ゆ

寛永二十年 九月吉日

とわれども是を初代と定めがごとく按ふに九月と記しるを
 草稿を京へて成しよきの月を書しよてもあふし其故
 同寛永廿年同九月此きりし作者吉原行彼志んやうの

大夫と遊びし事成記一画と半葉加へる本ふ又高尾無シ

「あづき男いづ思ひんせんとせんといふあはれものもあつたるゆゑに
あるに寛永廿年きく月あぢんあやとらういふ一とこそせし人ひら
二人あつたりし者其事あつたりしをいふにあづき男あつたり
平思ひんいふあつたりしをいふにあつたりし人曰昔あつたりし
とや人のゆゑにあつたりし中畧の事あつたりしをいふにあつたりし
あつたりしをいふにあつたりしをいふにあつたりしをいふにあつたりし

系所

前後略文

四多の内に せんと の事

前の十六人の大夫の名と此十八人を合せ見ると大同小異あり前よ
四郎右門内やまもとと記しとたやまとの事と何ぞ高尾野沢と改
名はつひし身けつたれきまね年ハ僅ふ十五や同年前よ名の見きり成初代

高尾三

正保

四年續

慶安

四年續

承應

三年續

明暦

三年續

といひぐなれど大夫ふ高尾の名當時より既ふあり

此正保より明暦小至る十五年の間改あるハ寛永十九年の前よ
名の聞えり高尾の何事ハ袖鑑ふ万治高尾を二代と定め
下職原ふ古高尾と記ししあはれども考き冊子と未見

二代目

万治高尾又号妙身高尾

万治元

東海道名所記豊端江戸の事とい條小三谷のち廿九人のま

あり中よ高尾かき跡あせとや張臂のものこ
梓刻の年号あといふも万治元年の作ある事五の巻五丁小証あ
其後の増補
てあて幾行もこに見えり是二代目の高尾あり

開 板 吉原かづ人目録

初葉小如此あり
以下ハ此草紙をも換て
考きてのこをいふ

吉原
三全

三
二

万治三年九月吉日
うろこ
新板

此草紙小新新できたま名名つけと記記近曾近曾の大夫の部九人名名を
を別別ふ出出今今やややききとと大夫の姿画姿画廿八人卷頭卷頭小此高小此高雄
あやあや前前年年東海道名所記東海道名所記小弟小弟ふふひひ高高雄雄と同人同人多事明多事明か
偕偕此高尾の墓此高尾の墓三三所没年所没年小先達先達の説説ままああややてて愚意愚意ふ
定定難難よよららとと大大概概を記記て後人の明談明談を俟俟
○誰誰々々も知知る如如く三谷三谷土手下土手下弘願弘願專稱院專稱院西方寺西方寺俗俗曰曰の高
尾の墓尾の墓ハ法号法号轉譽轉譽妙身妙身信女信女 万治三庚子年十二月廿五日
寒風寒風よよももろろくくととたたるるるるああふふととれ
と辞世と辞世のの勺勺を彫彫てあり

高尾六

○又一ツの墓ハ三谷寺町春慶院

法号為轉譽妙身也 万治二己亥年十二月五日

辞世の勺勺ハ前前同同或先生見出或先生見出されてより今今略人略人も知知る
ゆゆり先生先生ハ此墓此墓を實實とと西方寺の墓西方寺の墓ハ高尾高尾が事事成成
怒怒り土佐土佐椽椽が浄瑠璃浄瑠璃二河白道二河白道おおもも多多ををててより偽偽
作作せせものものあらあらんと記記されされるる又或翁又或翁の説説小春慶院小春慶院の墓
ハ西方寺西方寺の墓墓より新新ららと見見ゆゆ是是ハ高尾高尾が由縁由縁の者者欵欵或或ハ
高尾高尾の役役を勤勤めめかかぶぶの女女方方ががいい者者の後年後年小建小建物
ゆゆ急急年年と一一年年日日と廿日廿日と誤誤りりああららずず為為轉譽轉譽妙身妙身也也ととあある
が葬所葬所ああららびび供養塔供養塔の証証ありありととここハ姑姑此説此説小随小随之之一一万治
二年十二月没二年十二月没る高尾高尾が万治三年九月刊行万治三年九月刊行の吉原鑑吉原鑑小入小入べき
ととそれそれをを此草紙出来此草紙出来と冬没冬没と見見るる穩穩ああららん

系所 三つ内

高尾物語

かたひらけりかたひらけり

つとむひそ
うたえんを
うたひてまき
うまきあまき
とらるる川



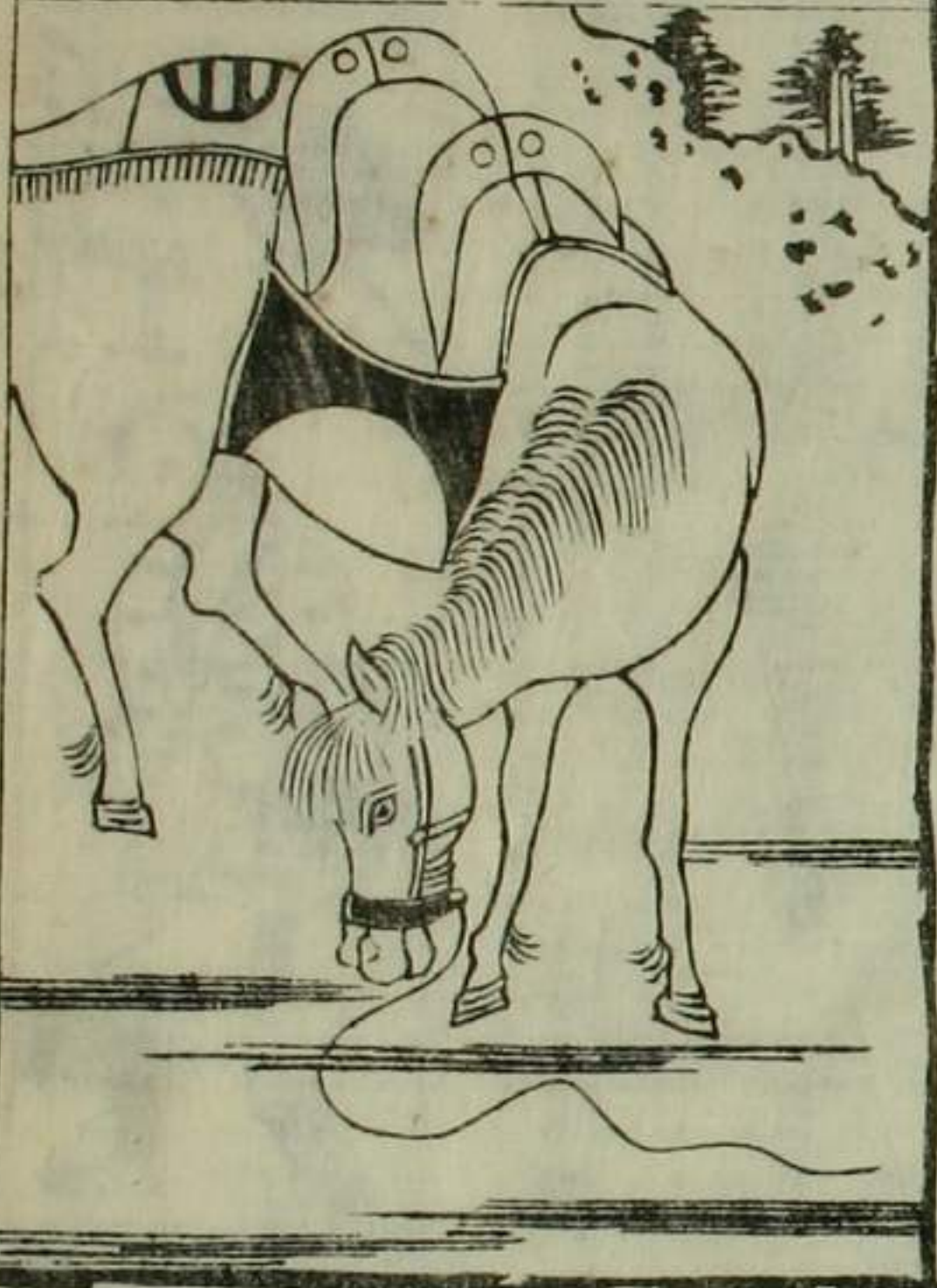
○此方治三年より其九年
の後印行志る 三言蔵子
貞享 名木の部
四年 尾の紅葉
新 柴村 正光院
浄土寺より左の
吉原三浦中
が所の二代目の尾
くちうらふり
はいふも更あり
佐理行成
くく二十
とを万ふり

高尾七

つとむひそ
うたえんを
うたひてまき
うまきあまき
とらるる川



つとむひそ
うたえんを
うたひてまき
うまきあまき
とらるる川



女ありしおなを
よれられ万治
今の正光院の
左の方より
心と改名
のき
うたえんを
の細本
かまき
あやね秋の
八余本
更懐

三代目

開板 吉原根元記 三代目高雄の姿画あや左小模と

按小此年間高尾の出来一々一其事下に見えたり

兼目小二代目高尾の事あり今の俗傳お似り是おま全彼二河白道の類おとをおる虚説と貞享の頃彫添おりおめお後年彫おとお考証あれども支おをおれおらおん

印本 吉原伊勢物語 考へおきお事あり又同年刊行の小歌惣お二

此高尾物語小身請の事あり弘願山のお傳お高尾身請せられ此寺門の前お来おるときに没おり故お小お之お葬おり予按
 ちお後年お妙身高尾といお傳おてお思おばおよお如お花街と出
 程お多お死おしおちおぐお此万治三年より九年の後刊行の讚お嘲お記お過
 小おりおしお物轉譽おるお墓お又お無お常お物道折おがお志おと
 の音おあるお見おいお高尾の墓お此西方寺お古およりおあおりおにおわおる

下職原小云三九高尾或書小曰々々宗高尾
 高尾代々のうちおの能筆

めりり
 あつとやむ
 つまのけは
 んりの人れ
 二をとり
 きりし
 ういもあ
 ちつとる
 ほどある
 きこも
 るも
 りのい
 ちす

此高尾の
 こと
 こと
 こと



以下半葉程入り

高尾八

といは墓ハ無キおしおり
 ちお此所おでお葬おり
 一お以お記おとお此お光院の
 事ハ諸先生の説おりおも
 未お尋おり
 ○上小模おるお此高尾病
 死の刻の辻賣の草紙俗小
 の下賣あり此歌を見
 高尾小女お男のほりおす
 あれおるお作りおてお人の
 浮名おうおしおあおるお讀賣
 のおりおあれおはお証と
 ありおかおるお

柳羽目前
小京町三郎
右門内記
あまゆき
同町と云
今の高尾と
あつて巻頭
小あひあつ
ちうり

今 同町
後 後

げ 君は 名も 知らぬ
 彼の 世に 名も あり 才一 其の 君の 後
 紀り いたし 一人の たり 君の 後
 い 外山 あり 君の 後
 あんて いたし 君の 後
 て あつて 君の 後
 ち あり 君の 後
 つ あり 君の 後

高尾九

う ころ あり 君の 後
 おも あり 君の 後
 子 とも の 志 あり 君の 後
 う ころ の 時 あり 君の 後
 を う した ひ 佛 あり 君の 後
 き わ あり 君の 後
 あ した り あり 君の 後

それよりいふ
 あり
 あり



高尾十

此根元記次小録をも「讚朝記」袖鑑の三種の端寫本まで流
 布一其後小添削し刻し物ある故是れ被書とそ
 して彼書よ此冊子を難しければ前小成し書かむ事詳
 かなん此所より予が見る刻本の順小記を具し以下摘要の
 略文等あるゆゑよすき摸しおあはる此三種の草紙小傳と
 大全との書未見

開

吉原讚朝記

一名時の太鼓



たうとらうとら

系丁

三浦里原の内

袖ろふ目太夫四天王の第一あり多門天の位あり心ありあつ
 う略中ききせんもゆふくうぬれどもあれども押しついでにせあを
 ぬあう希いあひなきううりまを直にうをふそひ宗とてんの字あ
 とらわう略中略中略中女とてんをあひのある子と思ひ三浦の水ありして

此町小住て久しなれがあらば色を思ふ侍と云根元記小曰ある人の問て
 りそくはむある花のついで妙あるを侍は如くよなり善言曰は君こそよ
 の時をいつく事もおひすのむかあふと云此後問答をたははるれば
 此君十五よあふぶが事も理のあふと申今はつを今年に世々と
 地はゆきの中さのちう金盛の花の時あれいつまうそよのよきと見
 ん中或人の曰はし去年の春の頃より今あは地をてえさあやといつ
 申はゆてよきのをたまと花とんが名のともう林の事と云
 同書のを名犬枕の条「あゆまの」の
 柳翁曰年立とよきとこに見ゆゆ心見ふ十六よりの勤とす
 るとき此高尾寛文三年ふ出来し

ちたの又前の吉原鑑ふ見ざる格子高尾の事を記す箋と
 別小まうけい混雑せんと思ひてあや

同寛文七年印本吉原雀ふ女郎ふ名成つる夏といふ条ふ
 小名名の付する其うもいふいふもを名名のうくあやれ
 あり名成つるあやまきとよ思ひてさうものあり中略同
 名と成る小玉の失あり「よまう」の名成ゆつていふむ
 事あり二よ大寄あふのとたふひふ名をゆつてあひまむのし
 き事あり三よあふふ其名をいふ所の名をつけよむ又同
 町あれが家名つていふよむむむ「四よ金盛あふをま
 格子をいふのうちふ同名あふむが必あふ名成むむむゆもの
 あり。大なる尾あせ大とくといふ如く下略大高尾とよがれしと
 前の吉原鑑ふ見ざる格子二人の高尾あふ「三代高尾か此名
 すきしうあふいふれむもや金盛といふのれむど他の家高
 尾あふ全二代目高尾の餘光といふし



吉原雀小載
高尾の姿画
是三代目也



高尾十二

開板 吉原よぶ鳥高尾の紋及禿の名記の如し。やアキムラとあり
[註]目もとさづりていままつたゆゆしきやもかあり色も黒くあから

名を言としてあやなくせり故をぬくおなれが何と云ひしが事あり
野良の評判よ玉川千と丞がもうむとむむ如く千と丞が疵を
けむらもつてもあや敷のうら美と云ひの盛ある時ありと
あつていふあやべしはる雄いふへのたつを言ゆ名をさすと
とつていふあやべしはる美と云ふと

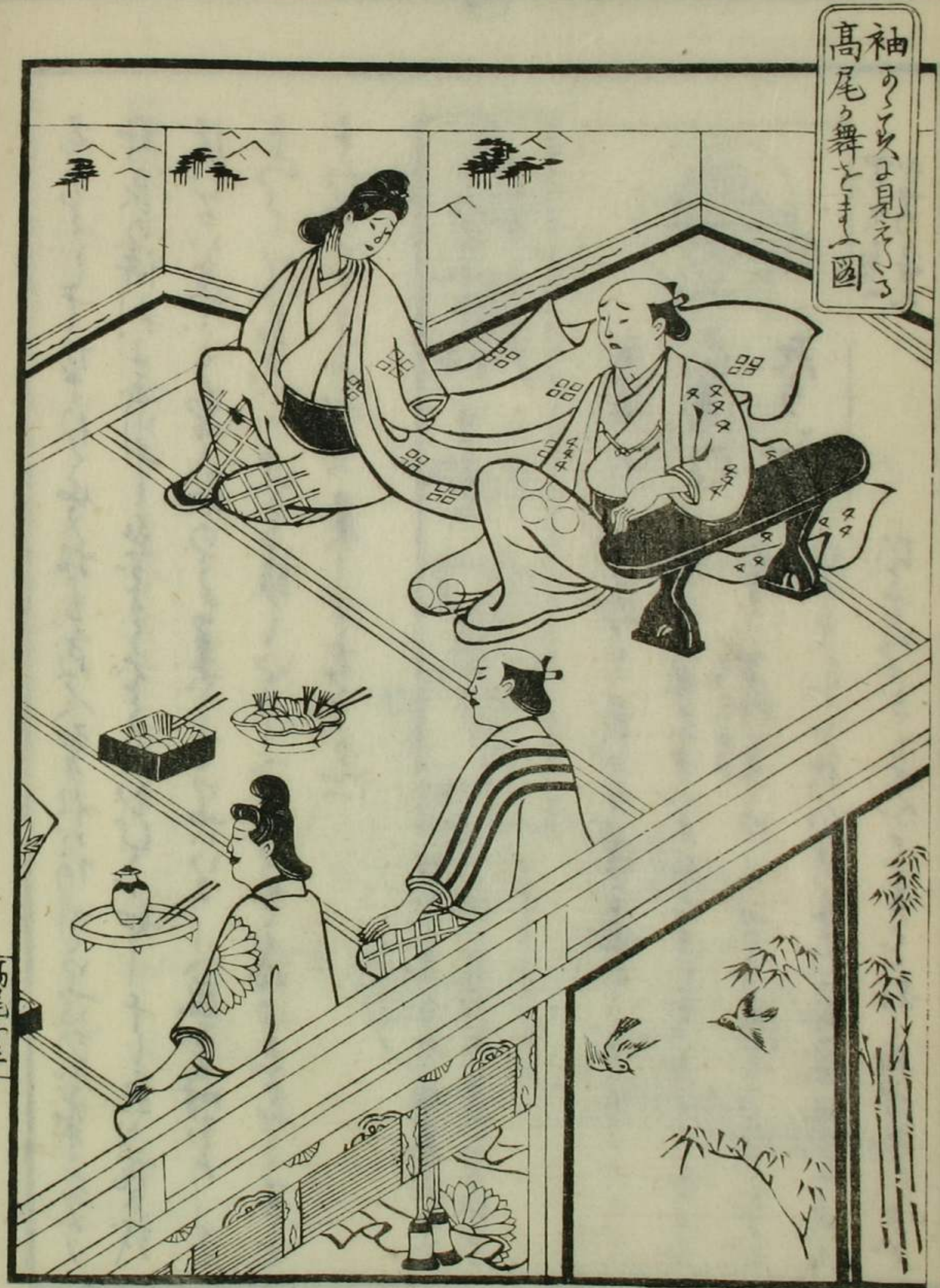
吉原袖むえん

梓彫の年号あり 按寛文六年秋
増補寛文八年の後ある証あり
ゆゑこふをいふ



やうてらよ
かきうらん

「名過りて代の先達全盛ありて人たうり」
跡へ出る君あまの太神あていあうがうやうてが
あまの勿神過て何一やうてあまのうらわい
あてそくとも快ひるの名のいもあうあまのうら
ひをてあまのせんよとまをあうあまのうら



袖
あつては見え
高尾の舞とまの圖

と人々のまゝにこれをしきりて大事の名中絶まじり

名もさる尾の多葉の紋のちりぬれやゆてのたつ川にめ

以上袖鑑の全文を「讚朝記」袖鑑に引く文見をよむ若

寫本のうちふちあやうに高尾の支をいひ寛文のちり高

尾の名を継し頃小書しやふれもあるわろやよての名中絶記

「のちを」といひゆつぎて發行の冊子とわられぬ多葉根元記

より前不出さんと思ひぬれぬ如く増補せりておかりて

寛文八年の後たる証巻中ふり其支ハ薄雲考ふりて

因ニ云

「俳諧是天道」延宝八年印本 高政獨吟

前々 妙のいたの尾の御はらとよ

附々 さうり方は埋まき惜き下り世末

二代目高尾の支をいひ此今もその支款可考ある昔高尾

高尾十四

十

十一

十二

延宝元

二

四代目

開板 吉原大雜書



高雄

京町三浦内

とある故延宝の詮あまもこく引はげて録せ
當時三代目高尾出廓あれども不詳
當時四代目高尾出来しうにありはれども是又不詳

此君評小曰さまがはる尾とがづみすくいで世百の浮名を取
あそびあつともやは海の字いもむお竹のよ成る君あつひどなる
死ひもむすすむとやあて名とてなまあてをえり九裸ふ
京紫と名を付しや三浦わて名をよむせむめが書りあての外れ



画本鯉の鉤針

前小録より此画本の
頭書なり

揚屋葛籠と産
籠と画人
の洒落見

高尾十六



箕山大鑑 小此高尾の傳ありと聞り此書延宝六年の浄書を

巻ハ平産老よりこれより前の明証をれども江戸小傳なる関卷

本小て予ハ事ある冊を見む又案より此産一子ハ女子之

俳諧點者評判花見車元禄十五年卯本立志の條ハ昔も尾まの腹ハ

侍承の子とまうけんハハをこちへ取て養をれども浪人の後牙

と養ハ島原の勤めたされハハ河内幸多あり女郎二代ありといども

は名二代の勤めとい事ハ高尾が子を産ハ事虚説ハハ

ハハ前より如く三代目高尾あり寛文末の事ハハ作者不

知高尾考ハ元禄年間の高尾とあり誤りハハ事論ナリ

此年間「吉原芥川」といふ草紙関板高尾の評の中より年曆とあつた前より引大雑書の事をいふ都鳥と隠名をいふ作者何れか故高尾を悪くしたといふ考へる事あり関本を見ていふ事あり故に録せむ

吉原山茶本草一枚 名寄 魚之部 一扇屋初山今より 一東屋吉田きよ 一丁字屋より一三浦屋たよりきよ 一中村屋夕霧きよ

と並べ出せり此高尾をいふ事あり事大雑書の文より知らるる故にきよ一山茶胡棟頭二冊是又延宝八年の印本前致未考

天和元 吉原下職原 三月の刻本より改元前より延宝九年と巻尾より元来世官三浦をいふ相續の官に代りたる尾其名をいふ如きれば職に任する事あり元高尾といふ事あり

高尾十七

今の高尾いふ事あり元来世官三浦をいふ相續の官に代りたる尾其名をいふ如きれば職に任する事あり元高尾といふ事あり



○神ぞく何の教でいふぞ君家の情よ何命あり
 柳翁曰くたの元高雄元吉原之轉譽妙身万治之。三九高雄寛文
 也。此今高尾四代目也。大雜書の高尾と同人多事明之。此高尾と
 小延宝元年よりの勤とするとき、九年目まで此草紙上木せし頃のこと
 也。此高尾出廓しうと塔がく最著振袖の高尾出来り

代々不弄高雄

吉原買物之調の巻尾不左の如くあり

高雄評

侍ハタカをとおもひありあり海にけん
 誠のきけしんらけりけり
 相のこきふけりし尾を継めりけり

高尾十八

思案未遠いあらん色一初秋の中旬冬
 ののみちわき何けのこむらんをいひ
 人ありてこの法やうおるあびあも
 けんと老の軸はおくろりあかから
 海りりぬのめてしねよあひくおし

此草紙例の梓彫の年号無巻中下職原の作者小近頃
 故の母弟小紫太夫格子下り事嘲その文

買物

肉を修衣木出入り尾あまを掃物に
 心をぬい糸町三つ内こむり
 まくと友まてふたはさうりてぬり
 つきやうあうくつくくひ

小紫の事と記すに不用ふ似れどもこれよりして天和二年と考へ
しう按小高尾が袖留り天和元年の秋より前の高尾出廓の同
年欵此高尾天和二年の頃天死なり同項小紫惡とすけ
小紫も出廓しう前ふ刊行の下職原ふもよんぐよ小紫を
罵りし事見ゆ

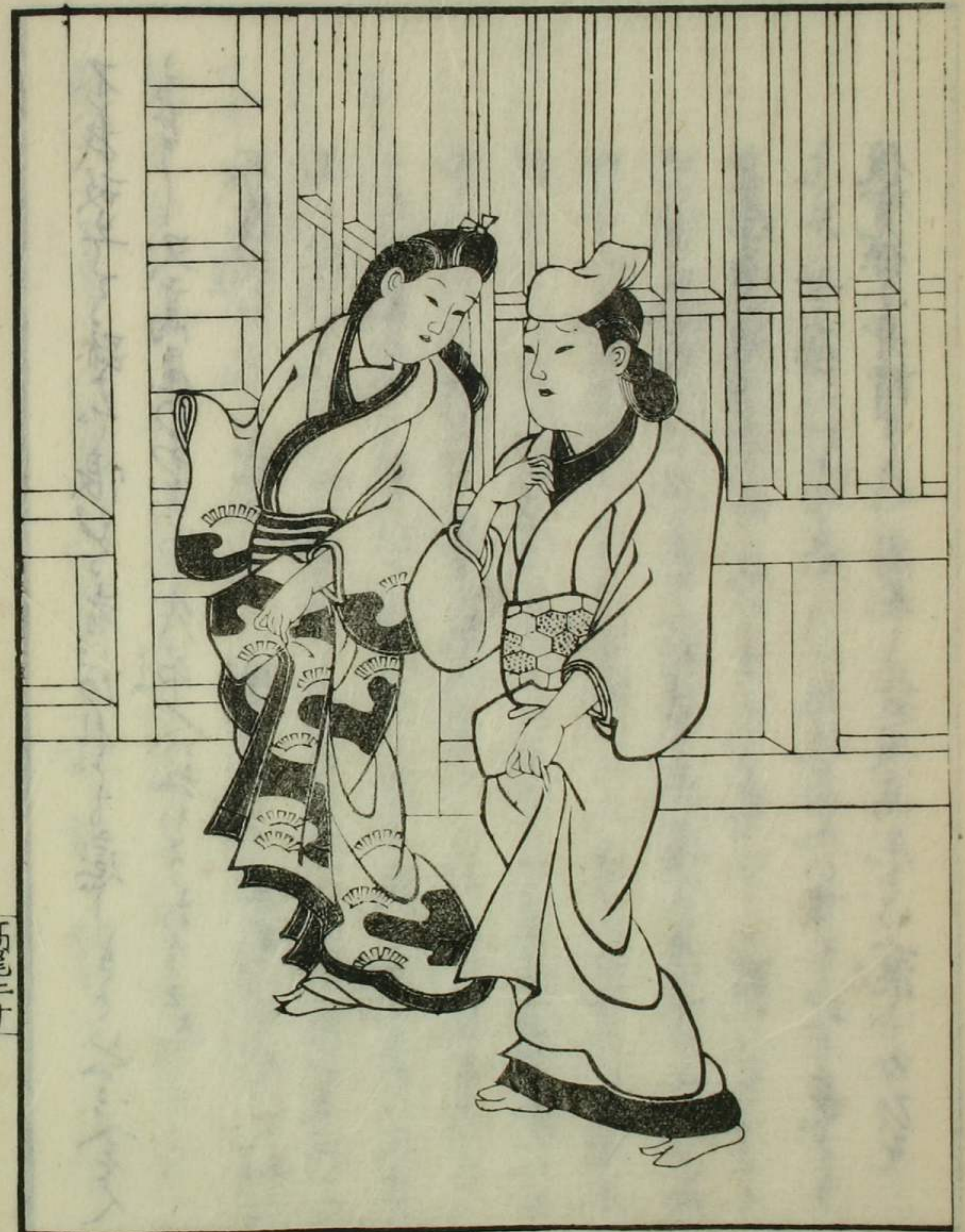
開板 吉原大豆俵 小新町三浦隱居内小泉といふ遊女を弟不出し
「尤三浦より高尾の君が跡とつばい小泉の君に二番ふうせんぞう」
吉原宿のそとより尾の紅葉ハタの秋風よそとれき名音川
よる芳野の花の絶て知らぬ異國の庵もあらうと名とつげのまよとつ
て巻頭よきうかご 然あやうく小泉の君あきまはむいひ巻
頭よるあゆりあつた外 云々又万太夫を許して「高尾が形身と思へば
箱ふいし」並しし又角町久右衛門内小若狭を許す詞のうちよ小紫が

不義故あつて跡を恨むる者いられども意もいとく人を
もたし又高尾のあきあき女吊人のあつたりあり云々

不義故あつて小紫とくにも誇りをもて高尾の天死天和二
年と前ふといひ如く考へしう此高尾僅の間勤あき代々の
うち小紫がれどもあつた吊人多くあつたと記しを見れば人あ
をしまれ遊女あつて後年越後高尾といひは是故前よのげし
許のうち小紫君越路の雪のまらあ生をこのより彼國の産ふを
何らぞやと風思ひよりくま書載しおまら具より廿余年の後宝永
中の寫本吉原つら草上巻小紫後高尾道中の度毎ふ着る小袖
を茶屋の娘揚屋のかきやうり小紫とよと思ひいひさうり
とぞ世ふ傳へけ下巻よ此越後高尾の事とより具より
後寛保小身請せられ高尾と越後高尾といひ混ぶあひそ



買物調の画中は高尾の
 姿繪見えぬ豆俵ハ
 こゝに高尾改後の
 草紙あれハ
 是ハあまのちの
 別奉より換
 添



高尾二十

俳諧虚栗

天和三年其角撰

遊心寺高尾が廟

名石ヲ糍ヨツホの根ユカ

才丸

去年没し高尾の手向ありあや遊心寺何地歎不知

再曰紫の一本小高尾小紫今なきとあり此書浄書せしハ

天和三年豆俵を彫し同年あり前年高尾没し紫

出廓あれども合どもと

俗ゆかり小高尾が油三といふ者小請出されしが嶋ふらび

住せるといふ事あり此書元禄六年小没し西鶴作り

是の作り物語秋若實説あり四代目高尾油屋の妻とあり

一事の記あり一衣目高尾の出廓西鶴が没し同年頃

○一枚摺吉原細見之圖の事

萬治年間より細見といふ一枚の吉原圖ありといふあれども未見

高尾世一

貞享元

二

三

四

年と彫る例の細見の圖小高尾を載りありあり其故

ハ次小記也

関板

吉原源氏五十四君小高尾無此草紙其角著自筆中彫

画の菱川師宣遊女評書之中の絶作あり去年や高

尾ありはらありども其噂ありどもそれと無キと見えは五

年の間高尾の名中絶ありども

高尾ありども知るべき
事申すの代ふ加ふ僅の間の
考



又云
如此の拙画
作も又
おもしろ
か



入系
吉原草摺子
ういてれめらち
おとあひあうこと

此後室永正徳に至るまで画風今様より古雅と夾ひてせしむるの模範

此草紙全五冊開板の後
故より十余年の間遊
女の噂を書き草紙出
板絶つるまで元禄十
六年小吉原百人一首と題
せる冊子ありと考証と
せむ事あり

高尾廿三

正徳元

七代目

七代目宝永七年秋正徳元年秋六代目出廊の間もあく出来
僅のうち勤みく正徳二年退廊 病死の噂をきき身請
せられしむる

開板吉原七福神 小左の如く高尾を弟一子出ま

高尾太夫 三浦四郎左衛門内

そのく高尾の傾城とすハ中略柳町を取て工津和揚屋の
名を付け初子の名なき女郎は山本の方野三浦の言
尾といわれ花紅葉の色を何そそあか明曆の後新吉原
小左されれども金龍山の花よれ角田川の月ま三浦通く人絶
中略今高尾小左もや七代の色いづく紅葉の系ま中略東夷
小秋の族よは君と知むと事外しと何又次の年正徳
年の春再興七福神の草紙と摺るふ高尾の名を削るの跡
花紙を出末のところが左の如く彫改めり

高尾世

過し頃高尾廓とせしむる継ぎ明女あり花紙の君ありて
そび出り座ととと何り是七代目正徳二年出廊の証と
とと又同年五月發行の

吉原より 深ふや如此高尾あり



三浦四郎左衛門内
高尾 虎

位あつた者が守輝執極て其感
たぬ染はばのまほはけ里の二首一外
のそるれを伴まるともあし

此を名二代目高尾
病死彼橋場正光
寺紅葉の塚ありし
の支あり全江戸
康子小よりて書
と見ゆればちり
うと

近曾出来 高尾の事といすも聞えど按ふ是は去年高
尾あり 前書おきく改め彫りも秋又高尾あきて
田舎など草紙の賣る故のさうら秋七福神は去年發行を

細見記より高尾あり 此享保八年九年頃高尾無き細見と見出しは八代目九代目のけちる明書

標紙裏小如此紅葉と云ふは是も代々の高尾が勢ひあり故



柳公羽按小八代目高尾は徳五年の勤めあり享保十四年より十四年されは是より前八代目出廓此高尾の九代目あり事必せり

京町一町目	右より
三浦四郎左衛門	
三浦	
小紫	
志のめ	
うつせ	
湯嶋天神女坂下板元回登	
相模登寺屋	

享保拾三年 申三月改 高尾廿七

関板 兩巴危言 小附 央林殘花の序より尾陰堂小紫とありて

卷中

三浦	うつせ	うつせ
小紫	志のめ	志のめ
うつせ	うつせ	うつせ

如此記も又同書小高尾の名を削りたるあり二本とも年号は享保十五年とされ此書出板の年九代目高尾退廓ありと前記に鑑の異同と此條は友人竹本氏の考あり又七代目出廓の條論ぜり七福神小高尾有無の事豊芥子が見ればあり後引吉原源氏六帖小十代目高尾此享保十年は出来しとあれどおぼしき次年の細見記二本とも高尾は

そとく是の元祖高尾より十代の後胤成さふ名をたつやといひ今の揚卷の君の枝葉山く享保十八年よりの勤まで太夫の位小備りの程あれが諸藝のす不及中略酒も少ありていん処あし歌もさ成好のつづむこの花の支あれがあま〜高尾代々の支跡いれみえり淡小くい〜これらも〜傳はるとり享保十八年と何れ廿年の書誤ありと先達の説既より同年刻三文字屋板細見も高尾あり

三

細見記 三改松 名寄歌仙の第一



ちま ころ内 高尾
一両あわれや人のたも〜

此細見ハ 鱗形屋板

序小「書初やとつりあろ〜煙始といふ〜の高尾の歳旦もさすかの君の年を〜めと合歡堂も賞美〜ぬ〜と何り元文より昔といひ沾徳が讚〜と何れ元禄頃の高尾の句あま〜

高尾廿九

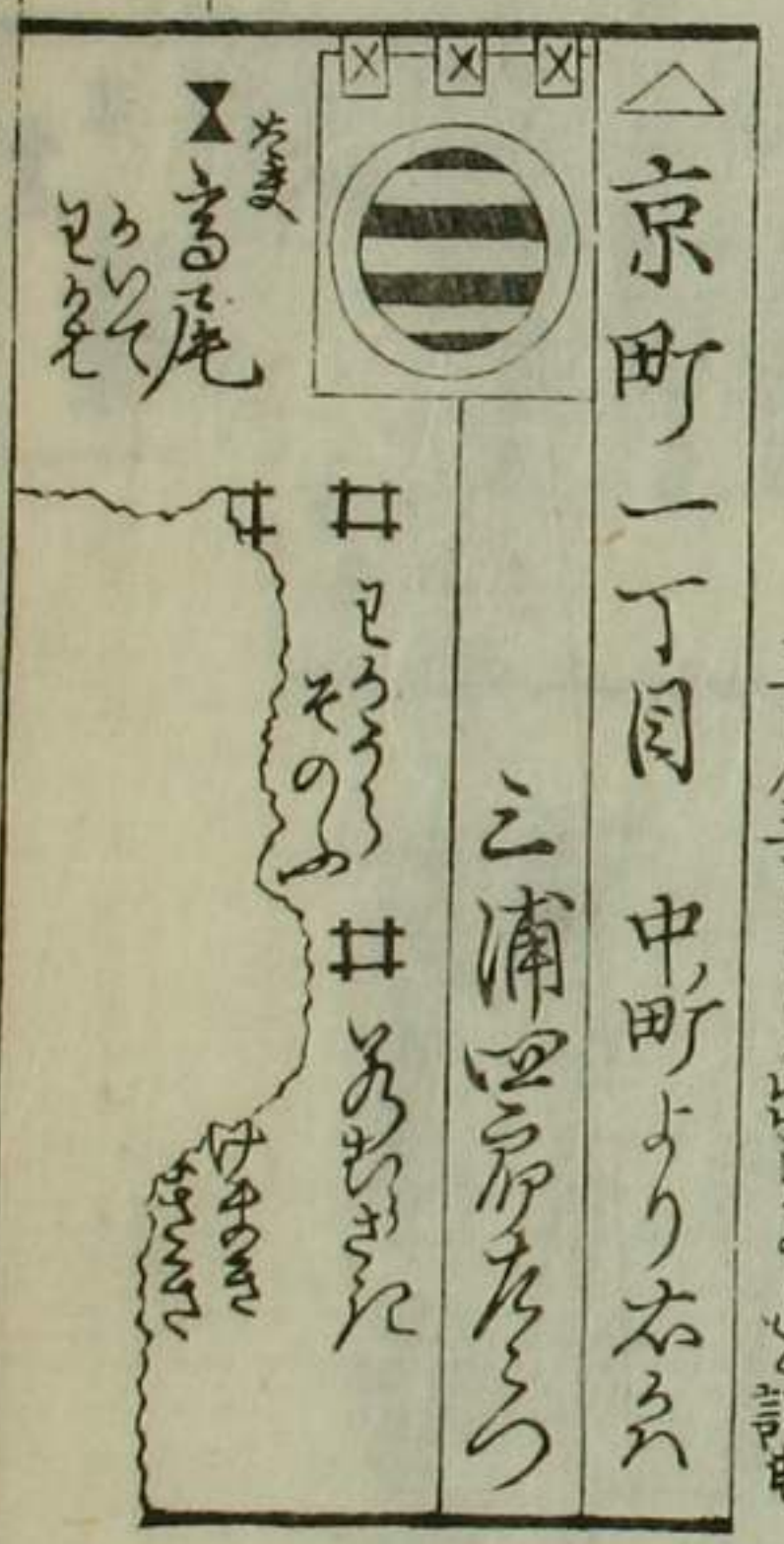
同年標題と吉原見物左門とよ〜俳書何り是ハ吉原の遊女の名を題として千七百七十五句不角門人封兩堂頂角獨吟
京町右冬 大三浦や内
ちま高尾 名もさる〜高尾の君やあ〜紅葉
春 江戸町夏 二丁目 秋 角町冬 京町 新町を月花とさ〜と
かろ事のおこあをれ ゆゑ細見記も名寄歌仙と載るあま〜

四

細見記 採題不知 小高雄あり 年久〜名の絶〜薄雲 三月三日より出〜と記

五

寛保元 細見記 鷲の思羽 如此寛保元年 高尾あり



初春葭取

細見記初録

高尾あり

玉屋山三郎あり 太夫花紫を三月より出さるる記

同年秋刻

細見記實語教

九十文

太夫 引船二人

高尾

つた

玉屋山三郎

とありて次の年

宝曆

春刻

道中集子陸

秋

里の地清

二本とも

高尾見えは是は故ありて出る間程ある名を改めしやるとぞ

柳亭種彦補綴

高尾年代記畢

高尾三十一

ありて人とする事ありて故人を吊りてとせしむるは
 其好むものなりては成りておはるるは若しと
 ち師翁世よはすくありし日著述を身の樂と
 骨董小思ひを耽らりて玉いささかゆゑは此高
 尾考も先輩の編ありしものよ自の考も
 加へられりて家も花もあがりて成師の旧友豊茂
 子かひよく志れりて色は翁の苦心せられり
 りのりてら小紙奥の拙とあらんは本意ありて

已考ふもたゞるやて新様よのふもるもつれつ
曾て故翁此編述ありて頃豊茂の其菴を訪
りて小四塚の由来つもの葉紅葉といふ菴内
て之をせられしを其妙身高尾の墳墓土高所
土子西方寺
山谷春慶院初代玉葉の墳墓西所新堀端永見寺
浅草光感寺ありゆ
ふつれり埋葬の地なると先達も定めぬれり哉
さるふ何きとて此必ありて既よ此ふも先達の
説といふ高尾の埋葬の實所西方寺ありといふ大

ふきいぬありて玉葉の墳にゆきしは
終ある事記よ小塚の由来も終ると定り其
身も新も塚のぬりてなむありて且これ等
を考へられし餘材も高尾のあり家あり薄雲の
代もさるあり人ありて等も告むり事あり
多しされし今此一卷も継ぐ其考へりて玉
菊の埋葬の實所とてさる薄雲の代も終り
んとありたりて世を經ぬれ

を窺ふともくた管のく大空を見るもよき學ひよ
いへきいあん業枯く年屆るるもあられ業と拾え
ときもいんやしの心あき身ふれくもあられ友人
同門の方とてやそを外にあじと何あもたあひおこ
きも人いろうつにけあきあきと相まねく思われぬ
とよき好めふもあはれいひふもん

遺弟

嘉永己酉仲秋

柳下亭種貞識

照心亭一筆求殿

東山亭種貞識

大祥生 柳下亭種貞識

